
骨董少年人形アリス

夏目真七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

骨董少年人形アリス

【Nコード】

N3864N

【作者名】

夏目真七

【あらすじ】

月燈舎げつとうしゃという古びた店の奥にある倉庫部屋には、この世でもっとも古い初期型の自動人形少年アルファ【a】、通称アリスが一人眠っていた。アリスを見つけたその日から、その少年人形に会うためにいつものように月燈舎に行ったある真夜中……。

1・月燈舎

髪は少しオレンジがかった茶髪、睛は蜂蜜色で琥珀石を埋め込んで
いるようだ。

綺麗なアーモンドアイは焦点が合わず、遠くを見ているような表情
をしているのを僕は気に入っている。

上質な絹のリボンを結んでいる襟元にはパールのピンが隠れていた。
月の粉で作られた皮膚は、月のある夜には彼と同じ自動人形には眩
しくてしようがないらしいが、最近では改善がなされたく、睛に
ある細工を施しているらしい。

しかし初期の自動人形はそうもいかないのです、夜に出歩く場合はア
ストロ燈がかかせないそうだ。

最初に月燈舎の古い倉庫の中にいた『彼』を見つけた時、僕の心臓
はドクンと跳ね上がった。

うつすらと覗くことが出来る瞳は硝子の様で、縁取られた長い睫が
誘惑するように絶妙に伏せられていた。

初期型の【】は、月燈舎主人が一から作り上げた自作で、完成に
費やした時間その他は想像を絶した。

もちろんその愛情も半端ではなかったのだらう。

【】とは単純に一番最初のという意味で付けた記号という説が一
般的である。

しかし研究者達によると、当時彼の愛していた女性【アリス】の頭
文字だという考えもあるらしい。

後に言い継がれた噂によると、少年のモデルは一目惚れしどこかの
王子様だとか、

教会に通っていた時にいつも最後まで残っていた少年の面影を元に
しただとか、
それなりに浮きだった話の方が多く出てくる。

夜が来るのがとても楽しみになった。

独特な夜の匂いと、光も疎らで静かな夜の景色

古い木製のドアを開け、薄暗く狭い店内の片隅でひときわ目を惹く。
ぼんやりと座っている一体の自動人形の少年。

重い扉を開けば、アリスはいつも座って僕を出迎えてくれた。

アリスを見ていると、とてつもなく遠いものを見てみたくなる。

できれば写真に収めたいけれど、絶対に残す事ができない一瞬の風
景が、僕は一番尊いと思う。

現実にはない空想の透明な感覚が僕は好きだ。

澄みきった空はいつまでも眺めていたい。

独特な夜の空気のおいが、どんな香りよりも心地いい。

『彼』の傍らには全てが存在していた。

だから僕はどうしても会いに行くのをやめずにはいられないんだ。

しかしある日、いつものように甘いお菓子とソーダを持って月燈舎

に行くくと、アリスは忽然と姿を消していた。

僕は慌ててアリスが座っていた骨董の椅子に駆け寄り、ぺたりと触ってみる。

冷たいベルベットの感触があるばかりで、そこにはやはりアリスがいた気配は感じられなかった。

ためにに辺りをぐるりと見渡してみても、古いキャビネット、バイオリン、洋インクの入った箱、古い机と積み上げられた椅子、年代物の地球儀、天体儀、星座盤、天体望遠鏡、古びた書庫がしまわれた大きな本棚、薄汚れてしまった木馬、何に使うのか分からない機械装置、大きな鳥籠、硝子ケースにしまわれた鉱石や化石、蛙のホルマリン漬けや蝶の標本。

かぶせられていた薄い布を剥ぎ取り、隅から隅まで探してもアリスは見当たらなかった。

僕は急いで、月燈舎の店主である人の元に走った。

月燈舎の店主は一年の半分ほどは旅に出ている人であるため、この月燈舎という店自体も一年のうち半分しか開店していない。

しかし、今や自動人形を扱う店は世界中探してもこの店でしかないため、客足は途絶えない。

月燈舎の店主は、月燈舎の大きな天窓から差し込む月明かりの下でのんびりと紅茶を楽しんでいた。

高さのあるシルクハットに、左右色の違うレトロな眼鏡をかけており、いつも黒いスーツと白い手袋をつけた背の高い青年だった。

月燈舎という建物そのものが、この店主が世界中から集めてくるコレクションの箱庭標本でもあるのだ。

そして自動人形の製造方法も部品の手経路も、この世で知っているのはたった一人、月燈舎の店主だけだった。

だから彼は秘密をずっと守り続けているために、一年の半分は月燈舎を閉めて逃げ回っているのだ。

「アリスだったら、君が面倒を見てくれたおかげで随分と動けるよ

うになつたんだよ。私は既に彼の事は諦めていたんだけどね。アリスの発条ゼンマイはとうの昔に壊れていたから、もう動かないものと思つていたけど。養生させていた甲斐があつたようだ。初期の自動人形は誤作動が多くて、ふとしたきっかけで動く事もあるから、その時にたくさん甘いものを食べさせてあげると良い。きつと彼は生き返るはずだよ。私はもう口出しはしない。君の好きにすればいいよ」

どこか投げやりな口調と、妙に優しい瞳が気になつたが、僕は何も言い返すことはせずに黙つて頷いた。

すると店主は、店の奥に飾られた先代の月燈舎の主人の写真とよく似た笑顔を浮かべて、窓の向こう側を指差した。

「庭に行つてごらん。きつと薔薇園にいるよ。彼と前の主人はいつも、あの薔薇園を育てていたから。アリスがいるなら、もう庭が荒れることはないだろうね」

店主にお礼を言つて、僕は月燈舎から駆け出して庭に向かつて走り出した。

月燈舎の裏手にある庭は、以前に入った時は枯れ木や枯花が朽ちて見るも無残な状態であつたというのに、今は見違えるほど綺麗になつていた。

濃淡が様々な緑が茂り、白亜の柱や噴水が透明な水を行き渡らせ、さまざまな種類の薔薇が庭一面に咲き誇っている。

アンティークローズの深い紅の花びらが、小さな水滴を乗せて月明

かりにキラキラと輝いていた。

まるで庭中に真珠を散りばめたかのようだ。

開けた庭の真ん中には、明るい満月に照らされながら、蜜色の髪をした一人の少年が薔薇の世話をしていた。

透き通るような白い肌は月に照らされて本当に透けているかと思うほどであった。

胸元で結ばれた上質な絹のリボンが音を立てそうなほどに華やかに揺れている。

心地よい夜の匂いを運ぶ夜風に吹かれながら、僕はアリスが月の光に照らされながら立っている光景に見惚れていた。

「アリス」

そう名を呼べば、アリスはゆっくりとこちらを向いた。

そのほっそりとした首には手の平サイズのアストロ燈がぶら下げてあり、金の細い細工と水晶で作られたその独特のデザインはアリスにとってもよく似合っていた。

どこかで見ることがあるような、しかし初めて見る壮絶に美しい笑みを浮かべて、月明かりと薔薇に囲まれながら、人間のようない少年独特のテノールで、僕の名前を初めて呼んだのだった。

2・海底花葬

僕とアリスは真夜中になると、海岸を散歩をするのが日課になっていた。

死んでいた庭をたった一晩で再生してしまうなど、自動人形であるアリスの並外れた能力は人間とは桁外れのものだったが、ずっと眠っていた所為かアリスはあまり体力がなかった。

波打ち際を歩いていると、黒い服に黒いリボン、黒い靴下に黒い靴を履いた少年達が、とある少年を取り囲んでいた。

真ん中にいる少年は砂浜に広げた白いシートの上に横たわり、胸の前で手を組んで眠っているようだった。

少年の手には白い花が握られている。

周りの少年達も白い花を持ち、一輪ずつ眠っている少年の傍らに花を置いていった。

「君達、何をしてるんだい？」

アリスが声を掛けると、黒服の少年達が一斉にこちらを向いた。

「葬式ごっこ」

「葬式………？」

僕は首を傾げてみせるが、少年達はさっと体制を元に戻し、また眠っている少年に花を手向け続けた。

全ての花がなくなると、「今日はここまでだ」と一番背の高い少年が一際大きな声で言った。

「続きは明日にしよう。陽映、もう起きてもいいぞ」

陽映と呼ばれた少年は、長い睫に縁取られた瞳を薄っすらと開けた。少年の絹のような白い頬が、何かを言おうと口を動かしたのと同様に小さく痙攣する。

桜色の唇が何かを紡ぐより先に、数人の少年達はさっさと浜辺から遠ざかってしまった。

陽映は仕方なく身体を起こし、その拍子に少年の細い身体の上にあった白い花が儂げに落ちていく。

「君、大丈夫か？」

僕が心配げに声をかけると、陽映は碧い睛を僕に向けた後、無表情のまま口を開いた。

「僕はもうすぐ死ぬんだ」

「え？」

「僕が死んだら、海に……」

そう言いかけた瞬間、少年は急に口を噤み、黙ってしまった。

そしておもむろに立ち上がり、ズボンのポケットに手を突っ込んで、美しい笑みを向けた。

「じゃあね」

そう言って歩いて行ってしまった。

僕はアリスの方を見たが、アリスは複雑な表情のまま少年が見えな

くなるまで見つめていた。

次に少年と会ったのは、あまりにも月明かりが眩しい夜だった。

僕が住んでいる家の近くにはテラスのような丘がある。
白い柵で守られているその丘には誰でも座れる白いベンチがあり、
その上にはベンチを覆うような白い木枠の屋根があり、年中つる草
が絡み付いていた。

月燈舎に行くために家を抜け出し、アリスに会いに行く途中だった。
本物のテラスで柵に腰掛けてるように、低めの白い柵に裸足で腰
掛けている少年がいた。
海辺で葬式ごっここの死体役をしていた少年、陽映だ。
足をぶらぶらと揺らして、今にもそのまま柵の向こう側に行つてし
まいそうだった。

丘は高い上に、柵の向こうはすぐ崖だったと思い出し、マジマジと
少年を見つめてしまった。

すぐ傍に靴が丁寧に揃えられており、声を掛けるべきかと迷う。
少年の向こう側には眩い満月と、星の光を受けてエメラルドに輝く
夜空、それからエメラルドの光と深い紺碧が入り混じった海があっ

た。

「あとね、1日しかないんだ」

「……何が？」

「この体を維持できるのが。それまでに、あの人に会いたくて」

陽映の言う、あの人とは誰だろうか。

そう思った瞬間、僕は陽映の頭上に信じられない光景を見た。

二つの月がぽっかりと浮かんでいたのだ。

一つは夜空に浮かんだ月であったが、もう一つは陽映の頭上にある。殆ど欠けてしまっている細い月が、陽映の頭上で儂く輝いていた。

「君と一緒にいたもう一人の方は気付いていたみたいだ」

「……アリスには、見えていたのか？最初から、その月が」

「生まれた時から、こうなんだ。この月が欠けきつて無くなる時、僕はもうずっと長い眠りについて、目覚めないんだ。それまでが、

あと1日」

相変わらず美しい笑みを浮かべて、陽映は言った。

あまりにも淡々と告げる陽映に、僕はどうしようもなくなって、どうしても聞かすにはいられなかった。

「君の言う会いたい人って、誰のこと？」

「……」

僕が聞くと、陽映はすっと笑顔を消し、海の方に視線を戻してしま

った。

「会えないよ」

「そんなの分らないじゃないか」

「分かるよ。だって、ずっと通ってても、僕には一度も姿を見せなかったんだから」

その時初めて、僕には陽映が弱音を吐いているように思えた。どこか寂しげな背中が、たった一人で眠っていた時のアリスと重なった。

月燈舎の扉を開いた瞬間、僕はその場で固まってしまった。

アリスが、真珠のような涙をはらはらと流していたからだ。

大きな天窓の下で月明かりに照らされながら、アリスは店主を見つめながら声も出さずに涙を流していた。

店主はそんなアリスをどこか困ったような表情で見つめ、空になっってしまったカップを手袋越しの手の中で弄んでいる。

その時僕は、なんとなく悟ってしまった。

陽映があんなに寂しげな背中をしていたのも、今アリスが泣いているのも、全てはこの月燈舎の店主の為なのだ。

店主は天窓から射す月の光に白い頬を輝かせながら、薄い色の瞳を僅かに伏せた。

「僕が死んだら、海の奥深く沈めて欲しい。そして、できることならば、たくさんの花と共に、全てを燃やしてから、海にその灰を流

してくれないか」

店主の口から放たれる言葉に、僕は何も言う事が出来なかった。

「先代の主人がよく言っていた言葉だったね。ねえ、アリス。私は彼ではないんだ。だから私とその子と会っても、きつと無駄だよ」

アリスは首を横に振った。

大粒の涙が床に落ち、美しい雫が一瞬だけ透明な花を咲かせた。

「マスターはもういない。だけど、この月燈舎にはもう貴方しか残っていないんだ。マスターの想いを全て背負った貴方になら、資格があるはずなんだ」

「.....」

「マスターの最初の子供は僕じゃない。貴方なんだ。その皮膚も、髪も、瞳も、声も、笑顔も、全て、受け継いだのは僕じゃない。たった一人しかいないんだ」

「.....」

「月時計という寿命を与えたのは、貴方が作った子供達にだけですよっ?」

そう言われて、初めて店主の顔色が変わった。

「昔、設計図を見たことがある。マスターはあまり乗り気ではなかったから、ほとんどは貴方一人で行ったことだよ。あの子とっては、貴方がこの世で一番会いたい人なんだよ」

僕はその時、目の前の光景を見てどうしようもなく悲しくなってしまうった。

静かに一筋の涙を流した店主の頭上には、あの少年と同じ、月が浮

かんでいたから。

底の見えない海が広がる海岸には、もう黒服の少年達はいない。

白い花だけが、ぽつりぽつりと浜辺に咲き誇り、パールのように輝きを放っていた。

それは全体がまるで、寿命を持たされた自動人形の為の枢のようだった。

2つの月が2人の頭上に浮かんでいる。

本物の月も星もない今日の空は、紺色のインクを流したような深い夜だった。

3・C a f e · s V A L O N 〱 パロ ン 〱

海岸沿いにある小さなカフェ「VALON」には、夜の零時を過ぎるとどこからともなく常連客が黒い影を引き連れてやってきた。海の水面に揺らめく大きな満月が夜天を輝くばかりに照らしだし、ミルクを零したような星の海が夜の空を埋め尽くしている。

「むかしむかし、小さな小さな闇の中で、大きな光の花火が弾けました。それが私達がいるこの小宇宙の始まりだったのです」

驚色に染めた髪を夜風に揺らすカフェ「VALON」のウェイターは、青白い顔を優しげに微笑ませて目の前にある機械装置を少しばかり動かした。

すると空は一瞬にしてブラックホールに飲み込まれたか日食でも起こったように真っ暗になり、突如色とりどりの火花が大輪の花を一つ咲かす。

花火がこの深夜の大空を覆った後、再び夜空に星達が生まれた。これら全てが舞台の一部である。

彼が操っているのはプラネタリウムを内蔵した、大掛かりな舞台装置の一つだ。

カフェのテーブルに座っていた僕はじつと夜空を見上げた。

「ふーん。どうして花火が弾けたの？」

「さあ、どうしてなのでしょう。それは誰にも分かりません」

「星垂ほたるさんにも？」

「ええ。私にも、他の誰にも。この小宇宙は、とても小さな星達の群で出来たものなのですよ」

「ふーん」

すると星垂ほたると呼ばれた年上の少年は、不意にポケットから月の石を取り出し、テーブルの上に無造作に並べた。
先ほどから舞台とは何の関係もない話で僕らと盛り上がる傍ら、肝心の舞台はしつかりと進行されている。

星垂は淡く微笑みながら白く長い指を優雅に動かし、ゆっくりと話し出した。

その時、舞台装置を一瞬の早業で自動操縦に切り替えたのを僕は見逃さなかった。

「月の欠片が集まってこの惑星が出来たのです」

星垂のポケットからは、次々といろんなものが出てくる。

海岸で見つけた魚の化石。

黒光りするクジラの化石。（あごの骨）
理科室にも無いような化石や鉱石の標本。

星垂は太陽系の惑星を、硝子玉や石、煙草ケースなどを置いて教えてくれた。

そしてこの小宇宙の事。

蜻蛉の夢。

毒の話。

月のしっぽの話。

新しく生まれたこの星の月の話。

星垂はなんでも知っているのだ。

彼がただ一つ知らない事は、星垂自身の本当の名前だけ。

「星垂ほたるというのは皆様がつけてくださった愛称なのです」

そう穏やかな口調で言いながら。

星垂はどこかアンタレスにも似た冷たく紅い瞳を光らせ、静かに微笑んだ。

その雰囲気にもゾクリとし、僕とアリスは同時に背筋を振るいあがらせてしまった。

星垂にとって、自分の名前というものは鬼門らしいのだ。

劇場では、怪盗と探偵の劇が美しいオペラと共に繰り広げられていた。

彼らの間で、ふんわりとした花飾りを髪につけた歌姫が澄んだ歌声で観客に訴えかけている。

白い銀水灯の耀く夜に、静かに溶け込んでいくような澄んだ歌声だった。

「彼女の声はいつも素晴らしいですね」

カフェのカウンターでは、カフェのマスターであるバロンが客の好みに合わせて淹れた珈琲を美味しそうに飲む月燈舎の店主の姿があった。

この劇は、月燈舎とカフェVALONが一年に一度、夏至の夜に開催する共同の舞台なのだ。

その舞台の舞台装置や衣装は月燈舎の店主が腕によりをかけて手がけ、演出や脚本を仕上げるのは主にバロンの仕事だった。

「アイリス・リタの歌声は、今やこの舞台の目玉だね」

穏やかな表情でカップを拭きながらバロンが答える。

円形劇場となっている舞台であるが、このカフェからでも見える配置になっていたのだ。

新しいチョコレトとヴァニラのコークと、キャラメルソースのか

かったアイスに乗せたチヨコレエトソオダを注文し直し、僕とアリスは舞台に夢中になっていた。

美しい白亜の神殿のテラスであるがらんとした空間から、一変して外に出ると薄碧の夜の空。

ぼんやりとした光りを纏うパールホワイトが照らす場所で追い詰められ、余命僅かだと暴かれた怪盗は、探偵に笑みを浮かべながら白亜の柵から飛び降り夜の向こうに消えた。

歌の最後はソプラノだけで静かに溶けいるように聞かせる。

『レクイエム Requiem』の響くような歌姫の圧倒的なアカペラ、序盤より少し遅れて静かに入ってくる伴奏の凜とした音、ハモリ、男性のテノールと、序々に重なっていく歌声のカルテットが心の柔らかい部分に響き、どこか切ないながらも美しい夜となった。

ここ最近ではずっと月燈舎に行くのは真夜中になってからであった。というのも、アリスが主に活動したがるのが夜だったからである。アリスの肌が月の粉で出来ている為か、単純に太陽が苦手だからなのかは分からないが、アリスは日が高い時間はあまり外に出たがらず、例え外出したとしても薔薇園の様子を見に行ったり薔薇の世話をテキパキとこなす程度だった。

他の自動人形が太陽が苦手という話も聞いた事はないが、本来の自動人形の性質的に問題がなかったとして、アリス自身が日中が苦手だと言っただから無理に連れ出す事はもうとうに諦めた。

しかしそう考えると、月燈舎の店主はどうして平気なのだろう？

と、僕は最近はいつも首を傾げてしまう。

直接聞いたわけではないのはつきりとは言えないが、月燈舎の店主自身が自動人形ではないかというのは僕の推測であり確信である。しかし店主はいつも昼間も夜も特に問題もなく外出しているし、日頃から買出しや洗濯や接客など、元気に動き回ったりしている。

店主の自動人形説が浮上した事で、僕の中にある月燈舎の謎がまた一つ増えてしまった。

そもそも僕は、月燈舎がいつからあったのか、どんな店なのか、どうして自動人形が月燈舎でしか取引されていないのかなど、かなり前からいくつもの疑問を抱えていたのだ。

そして、あの店主は本当に人間なのか？という謎が加わり、僕にはますます月燈舎という店の全貌が霞んで見え、同時に数倍も魅力が増したと思っている。

些細な問題だ。

月燈舎の扉まで走りこみ、僕は勢いよく木枠の扉を開いた。すっかり色あせてしまった銅製の小さなベルが涼やかな音を奏でる。

「アリス！窓の外を見てみなよ！虹がよく見える……」

思わず張り上げた声の音量を落としてしまったのは、月燈舎の中で数人の子供達が作業の手を中断させて一斉に僕を見ていたからだ。さまざまなアンティークやガラクタが雑然と至る所に置かれている月燈舎の店内にある唯一の空きスペースに十数個程の机と椅子を並べて子供達が犇めき合っている光景は異常といえば異常だった。

急に自分が場違いな所に来た気分になって視線を泳がせると、店の奥にあるカウンターに座っていた店主が笑いを堪えており、店主の横に立っていたアリスも眉を八の字にして笑っていた。

僕は子供達の視線から逃れるように移動しだすと、子供達は途端に興味を失ったのか一人、二人と順々に黙々と作業を進行すべく手を動かしました。

なんとか店主とアリスの元に辿り着いた僕に、アリスが片手を上げて視線を向けた。

「いらっしやい、今日はいつもより随分と早いんだね」

「アリスこそ、起きてるなんて珍しいな。で、こんなにいっぱい子供がいるなんて今日はどうしたんだ？」

僕が疑問をそのまま口にする、ようやく笑いを引つ込めた店主は硝子をステンドグラスのように張り合わせたランプを自分の肩位まで上げて見せてくれた。

「星祭り用のランプを作ってるんだ。今日の本番用にね。夕方ぐらゐから広場で始まるから、君もアリスを誘いに来たんだろう？」

店主が持つているそれは色とりどりの薄い硝子を月や星や花や葉の形に切り抜き、それらをバランスよく側面に張り合わせ、中に豆電球を灯したランプは昼間の光が射す室内で見ても大変美しいものだった。

暗い夜の中で灯せばもつと美しいだろう。

星祭りでは皆それぞれにランプを用意し、それを持って広場を行進したり、歩き回るのが慣わしとなっていた。

そのランプはこの時期になると安価なものから職人技が光る高価なものまでさまざまな店で売られるようになる。

ようはランプの中に物が入るスペースがあり、なおかつ光が燈れば事足りるために手作りする者も意外と少なくはなかった。

ランプの中に何を入れるのかは人それぞれだ。

願い事を書いた羊皮紙というのが一派的である。

「どうせなら作った方が浪漫があるかと思って、先週からチラシを撒いておいたんだ。意外に反響があつて嬉しい限りだよ。硝子なら一杯余つてるしねえ」

「それで、店主が子供達相手にランプ作りの講習会を開いてたんだ。僕も手伝いを頼まれてただけでなんだかやる事があんまり無くてね……。せつかくだから一緒にランプを作ってみようかなつて話してたんだよ。君もどうだい？」

「面白そうだな。やってみたい」

「そうか、じゃあ準備してくるから待つててくれ」

それだけ言い残して店主は店の奥に姿を消した。

それを見送ると、ところで、と言いながらアリスが僕を振り返った。

「さっき慌ててたみたいだけど、どうかしたの？」

「え？……あ！」

叫ぶなり、僕はアリスの腕を掴んで大きな窓の前まで走ったが、虹はすっかり薄くなっておりとても感動できるようなものではなくなっていた。

「あー、消えちゃった」

「空に何かあったの？」

「さっきまで虹が出てたんだ。アリスは見たことないだろうと思っただから、見せたかったんだけどね」

「そうだったのか、残念だな。……。今度また現れた時は教えてくれね。すぐに駆けつけるからさ」

「もちろん」

そんな約束を交わし、クスリと笑い合う僕とアリスであった。

5・星祭り - 硝子ランプ -

色とりどりの薄い硝子を手に取りながら、今夜の星祭りに合うようなランプはどんなものかと考えてみた。

アリスは早々にデザインが決まったのか、金色の硝子を店主に渡し星の形に切って貰っている。

アリスの首にいつも下げている掌大のアスト口燈は人為的に闇を作り出す装置だが、このランプは真正銘、淡い光を作り出す20センチ程のランプである。

アリスにとっては手作りのランプがとても珍しいのだろう、表情からも楽しんでいるのが伝わってきた。

窓から零れる太陽の光に硝子を翳すとそれだけでもキラキラと輝くスタンドグラスのようである。

なんとかデザインを決めたはいいが、僕にはセンスも画力も最初から皆無であったようだ。

図案を見せると、店主が一瞬固まって何か考え込んだあと、徐に吹き出して笑いを堪えようとはしたらしく肩を震わせながらクツクツと喉だけで笑っていた。

なんとなく顔を合わせずらいと気を張っていた僕だったが、この店主の反応になんだかだんだんと馬鹿らしく感じてきてしまった。

「……………失礼だなあ」

「クツク。いや、すまない。個性的な絵だと思ってな、うん……………
……………ところで、これはヒトデかなあ？」

「違うよ、星だつてば！」

最初に言うておくと、星祭りのランプに星をモチーフにするのは一般的である。

中には星そのものの形をしたランプもあるほどだ。

なので断じてアリスに影響された訳ではないが、星祭り初参加のアリスが星の形がスタンダードなのだとは何故知っていたのか？が少し不思議だった。

星祭りという名称から連想したのだろうか。

「ああ、星か。私はてっきり海をイメージしたものかと」

「宇宙だよ！最初に言っておくけど、これ魚じゃなくて月だからね」

「……………あれ？蜥蜴じゃなかったのか？」

「店主……………」

「あつははは。冗談だよー、冗談」

こんな調子で微かに子供達の笑いを誘いつつ、店主が硝子をカットしている間ふと店内を見渡すと、子供に混じって学生服を着た少女が真剣な固い表情で硝子と睨み合っていた。

大きなアーモンドアイとライトブラウンの瞳は遠目に見るといくらか勝ち気に見えるが、その整った容姿が挨拶してどこか大人びた雰囲気も持っている。

十歳前後の子供達の中で一緒にランプ作りに参加している僕が言える義理ではないが、真剣すぎる眼差しも含め、その少女の周りだけが妙に異質であった。

さりげなく見ていると、店主が作業の手を止めないままひそりと口を開いて説明してくれた。

「店の外に貼り紙貼ってた時にいきなり走ってきてね、私も参加していいですか？って、凄く真剣な顔で頼み込まれちゃってね」

「へえ……………そうだったんだ」

「一応子供向けのつもりだったからキットしか用意してなかったんだけど、1人も2人もあまり変わらないし……………。はい、出来たよ」

「うん、ありがとう」

カットされた硝子を受け取り、ちらりともう一度だけ少女を見た。僕より3つくらいは年上に見える少女は、はっきり言って美人だ。顔立ちはアリスの方が整っているけれど。

「なに見てるのさ？」

いつのまにかアリスを凝視していたらしく、不可解げな顔をされた。

「いや、別に？」

曖昧に笑って誤魔化すと、アリスは納得してはいないものの複雑な表情を浮かべたままランプ作りに手を動かし出した。

星祭りまでもう時間が少なくなっていたため、僕もランプ作りに集中し始めた。

横目でちらりと店主を見ると、にっこり笑いながら僕らの様子を楽しげに眺めていた。

6・星祭り - 片翼の天使 -

気が付けば、窓から零れる日差しは蕩けるようなオレンジに変わっていた。

朱と金が混じったような空は東になるにつれて夜が微かに闇を引き連れて迫ってきている。

子供達は次々とランプを完成させ、店主に豆電球をつけて貰った子供達は大はしゃぎだって喜びお互いに自分のランプを見せ合っていた。

お礼と歓声が入り混じりながらも外に飛び出していく。

最後まで真剣な表情で机から動かなかった少女も、完成品に満足したように肩の力を抜いてランプを夕陽に掲げていた。

オレンジの光を通すと本物のステンドグラスのように煌めくランプを手に淡く笑う、その様子が妙に印象に残った。

そして少女はパツとこちらを振り返り、店主に向かってお辞儀をし、ハキハキとした口調でお礼を言った。

「どうも！ありがとうございます！」

「いえいえ。満足いくものは出来たかい？」

「はい！」

「それはよかった」

楽しんでおいでね、と店主が微笑むと、少女はもう一度元気よく頷いてからニコリと笑い、机の脇に下げてあった学生鞆を引っつかんで店から飛び出していった。

それを満足したように見送った後、改めて店主は僕達に振り返った。

「君達も楽しんでおいで」

「あれ？店主は行かないの？」

きよとりとアリスが首を傾げる。

深い眠りから醒めた当初と比べれば、随分と感情表現が豊かになっていると感じる瞬間だった。

アリスの問いかけに、店の片づけを始めた店主は微かに苦笑する。よいしょ、と机を4ついつぺんに持ち上げて店の隅に積み上げていく店主を僕は呆気に取られながら見守った。

華奢なように見えて、ここまで力持ちだったとは予想外である。

「店があるからねえ。意外と稼ぎ時なんだ」

「じゃあ、なんで一緒にランプ作りしてたの？」

店主が先ほどまで作っていたランプはどう見ても僕達の物よりも凝った作りのランプであった。

今は月燈舎の入り口にある錆びた風合いのレトロなオブジェに他のランプと一緒に吊るしてあるそれを指差しながら、今度は僕からここぞとばかりに突っ込んだ。

夜を思わせる藍色や深い緑、透き通るようなライトグリーンの硝子が全て葉の形になっており、生い茂った葉に隠れるように三日月を模した金色の硝子が煌いている。

硝子と硝子の間にわざと隙間を作って葉のモチーフ組んでいる為か、その隙間から零れる光も美しいランプであった。

「あれは趣味。さあ、もうすぐ始まるだろうから行っておいで」

そういうものだろうかと心の中で首を傾げるが、その時月燈舎の扉がベルの涼しげな音と共に開きお客が入ってきた。月燈舎でも星祭りのランプを売るようだ。

ここは星祭りを開く広場に行く途中にある場所だから、行き際にラ

ンプを買う人々ですぐに賑わってしまった。

店主が稼ぎ時だという言葉の意味を理解し、僕とアリスは顔を見合わせて頷いた。

そして再び店主に向き直る。

「うん！ありがとう！行こう、アリス」

「うん！」

明るい顔をして返事をしたアリスの手を取って、僕達は走り出した。月燈舎を出ると眩しい程の夕陽があたり一面をオレンジに染めいた。思わずアリスを振り返ると、アリスはにこりと笑って力強く頷く。それに安心し、僕達は再び夕陽の中を走り出した。

月燈舎から少し走ると国道があり、その両側は地平線まで果てなく広がる麦畑が1キロ程先まで続いていた。

比較的交通量の少ない穏やかな道だ。

夜は水銀灯の明かりがほとんど届かないほど暗くなる道であったから、真夜中の散歩にも麦畑の最初の方にしか連れ出していない。

つまりアリスは広場にも行くのは初めてであり、麦畑の向こう側を何一つ知らないのだ。

「夕陽もこの道も、僕は好きだなあ。ずっと歩いてみたいと思ってんだ」

思った通り、アリスは麦畑の道を入ってくれたようである。

国道を暫く歩いていくと、麦畑の途中に朽ちた電車が遠くに静かに佇んでいるのが見えた。

「あの電車の事を、店主は話したかい？」

尋ねると、アリスは首を横に振った後に首を傾げた。

「何かあるの？」

「あの電車、昔はきつと宇宙を走ってたんだ。僕は一度だけあの電車に忍び込んだことがあって、その時に拾った小さな機械を店主に見せたことがある。でも店主でもその機械がこの世のものであるとは思えなかったみたいで、信じられないって顔してたよ。それは小型のプラネタリウムで、掌の中でカチカチツと機械を土星の輪のように回っていたメモリが動いてね、暗い所で青い宝石を散りばめた様な天の川を生み出したんだ。あれはきつと、宇宙の地図だよ。あれ以来動かなくなっちゃったけど、僕の宝物さ」

「へえ、いいなあ……！見てみたいよ」

思った通りに瞳を輝かせたアリスに、僕の心は一気に躍り上がった。

「じゃあ今夜、星祭が終わった後に見せてあげるよ。楽しみにしてて！」

「うん！」

ばあつと期待の眼差しを向けながら何度も頷くアリス。

それを見つめながら、僕はあのプラネタリウムが今日こそは動き出すようにと願いを籠めなければならぬと思った。

星祭りに星に願う願いことはそれで決定だ。

年に一度の願い事がそれとはほんの少しばかり切なかったが、仕方が無いと心の中で苦笑した。

その時である。

「危ない！」

アリスが叫んだ。

咄嗟に振り向くと、まだ小さなライトブラウンの子犬が国道の真ん中にいるのが見えたのと同時にモーター音を唸らせた車が風を切って走り抜けた。

アリスが駆け出すのを強引に肩を掴んで押し止め、僕は車に轢かれそうになっている子犬に向かって駆け出していた。

どんな結果になろうとも、衝撃があることは覚悟していた。

しかしいつまで経っても来るはずの衝撃も痛みも無い。

恐る恐る目を開けると、僕は子犬を抱えた恰好で、今飛び出したはずの歩道の端に座り込んでいた。

ふと顔を上げて国道を見ると、先程ぶつかるはずだった車は何事も無かったように走り去っていた。

何が起こったのか分からず呆然としてみると、信じがたいほど大きな純白の翼が目の前ではざりと音を立てた。

僕が子犬を抱えていた腕の下に、僕の身体に手を回していた別のしなやかな腕がゆくゆくと解かれたのに気づき、驚いて頭上を見上げた。

するとそこには左の肩に大きな純白の翼を生やした黒服の天使がニコリと僕に微笑んでいた。

天使の夕陽に染まった髪が紅蓮に燃え上がっているようにも見え、その長い前髪の下で美しく微笑んでいる天使の姿をした年上の少年に、僕は何が起こったのか理解できず目を見開いた。

すると少し離れた所からアリスが僕の名前を叫びながら駆け寄って

くるのが見えた。

力の抜けた腕から子犬は抜け出し、ひと吠えした後そ知らぬ顔で麦畑の中に消えていった。

それをなんともいえない思いで見送りながらも、アリスの慌てようからして、先ほどの出来事はやはり夢ではなかったのだと改めて再認識する。

「馬鹿！怪我するところだったんだぞ！」

「……………ごめん」

僕にも何故自分が謝っているのか分からなかったが、あの瞬間はともかく子犬とアリスだけは守らなければならぬと思った。だから体が勝手に動いたのだ。

しかし僕をご覧の通り無傷であり、もちろん子犬も無事であり、車もそんな出来事は無かったとばかりに既に遠ざかって視界から消えている。

何が起こったのかさっぱりだったが、とりあえず僕はアリスを安心させようと軽く笑って見せた。

「アリス、どうもなっていないよ。ほら」

怪我一つ無い事を見せると、アリスは脱力したのか僕と同じように座り込んでしまった。

「あーもう、馬鹿！」

「ごめん」

心配かけたことは反省していると示してみると、アリスは目尻を赤く染め、不機嫌そうな顔をして僕を睨んだ。

その様子には僕はくすぐったくなってしまう、自然と頬が緩んでしま

った。

「うんうん。いいねえ、熱い友情っていう感じで」

頭上から心地よいテノールが聞こえてきてバツと2人同時に振り向くと、片翼の翼を持ち、丁寧にも頭上に光の輪を載せた天使が腕を組んで「うんうん」と頷いていた。

先ほどの拘束されていた暖かい腕を思い出し、僕はまだ信じられないと思いつつも恐る恐る声を掛けてみた。

「あの」

「なに？」

「……返事したよ、アリス。幻じゃなかったみたいだ」

「うん、僕も夢か幻覚かと思った。お兄さんはもしかして天使？」

アリスの率直な問いかけに、その天使は目ばまちくりさせてきよとんとした。

そして大げさに「うーむ」と考え込む仕草をした後、大げさな動作で大きく頷いた。

「うん。実はそうらしいんだ。俺は君達が言う通り天使という奴なんだろっね」

「?どついうこと?」

「……実はね、俺は天使の見習いみたいなもので、正確にはまだ天使じゃないんだ。だからほら、翼が片方しかないだろ?」

そうやって天使は僕達に背中が見えるようにその場で半回転した。黒い服で覆われた背中から、純白の翼をバサリと一回羽ばたかせて見せてくれた。

それは本当に美しく幻想的な姿であり、まるで白鳥のようなしなや

かで綺麗な翼に、未だ信じられないが本物なのだと、僕とアリスの表情は一気に明るくなった。

「でも、今僕を助けてくれたのはお兄さんでしょ？」

「俺が知ってる奴に似てたから、ついね。ただの気まぐれだよ」

「それでも、助けてくれたんでしょ？ありがとうございます！」

「僕からも言わせて。ありがとう！」

二人で声を張り上げると、天使は一瞬目を丸くした。

「まいったなあ……………」

そう呟いて数秒ほど視線を逸らしていたが、僕達がずっと見つめていると根負けしたのか苦笑して息をつき、照れくさそうにへらりと笑った。

その表情があまりにも人間臭く見え、先ほどまで抱いていた幻想的なイメージとのギャップに僕とアリスは呆然とする。

その一瞬後、気づいた時には片翼の天使はまるで粉雪のように消えていた。

純白の大きなひとひらの羽根が、麦畑の上をひらりひらりと飛んでいくのを見て、僕は呆然としたまま思わず呟いてしまった。

「本当に天使が助けてくれたの……かな？」

さりげなく周りを見渡すと、星祭に向かう子供達や親子連れや老夫婦などがちらほらと歩いているが、彼らが天使に気付いている様子が無い事に僕は内心首を傾げた。

あまりにも現実味の無い出来事であったし、しかしそれでもしっかりと覚えているリアルな翼の羽ばたきや温かな腕の感触に、本当に

あつて欲しいという期待と戸惑いもあった。
すると隣にいたアリスが小さく笑い、僕に視線を寄越してこう言った。

「きつと本物だよ。あの一瞬で、君を子犬ごと元いた場所に運んでくれたんだ。僕のお願い、叶えてくれたのかもしれないね」

「え？アリスのお願いって？」

「ランプを作つてすぐに羊皮紙の中に入れおいたんだけどね。んー、やっぱり秘密」

「アリス、それズルイ！」

口元到人差し指を当てて笑つたアリスに、僕は半眼で口元を釣り上げてアリスに詰め寄つてみた。

何事も無かつたかのようにこの麦畑の道を再び一緒に歩き出せる事が奇跡なんだと思ひながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3864n/>

骨董少年人形アリス

2010年10月9日15時22分発行